

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（看護学）	氏名	加澤 佳奈
学位授与の条件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
医療依存度が高い者の特徴分析と高度ケースマネジメントモデルの試行			
論文審査担当者			
主査	教授	梯 正之	印
審査委員	教授	川崎 裕美	
審査委員	教授	祖父江 育子	
〔論文審査の結果の要旨〕			
<p>近年，少子高齢化による生産年齢人口の低下，医療技術の進歩，慢性疾患中心の疾病構造への変化，患者ニーズの多様化・複雑化を背景に，増加する医療・介護費の抑制は先進国共通の喫緊の課題となっている。医療依存度が高く複雑なニーズを有する慢性疾患患者へ適切に対応するためには，彼らの身体・精神・社会的ニーズを包括的にアセスメントし，疾病管理の視点に基づく予防的，実在的なサービス調整が必要となる。そこで本研究では，医療依存度が高い慢性疾患患者を適切に抽出し，患者に対する適正なサービス利用の調整と疾病管理を行い，患者・家族の Quality of Life（以下，QOL）の維持・向上を目指す，看護師による高度ケースマネジメントモデルを構築，試行し，その効果を検討することとした。</p> <p>研究1では，ケースマネジメントの対象となる医療依存度が高い者の抽出基準の示唆を得るため，2014年4月～2015年3月のA市国民健康保険（以下，国保），後期高齢者医療制度（以下，後期）加入者の診療報酬明細書及び介護給付費明細書を分析した。まず，対象者全体の傷病名と各医療費を集計し，患者数と医療費に関するパレート分析を行った。その結果から，国保の医療・介護費総額の80%を使用していた利用費上位25%の者及び後期総額の80%を使用していた利用費上位33%の者を医療依存度の高い者と定義した。</p> <p>次に医療依存度が高い者の特徴を明らかにするため，高額な費用を使用しない者との2群比較を行った。その結果，医療依存度が高い者は，レセプト枚数，入院日数，高度救命救急利用回数，外来受診日数，要介護認定と要介護度3以上の認定を受けた者の数，傷病名の数が多い傾向があることが明らかとなった。さらに，医療・介護費に影響する要因を検討するため，従属変数を医療・介護費，独立変数を医療サービス利用状況，要介護度，疾病構造としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。このとき，疾病構造に関する変数を傷病名の数又は被保険者全体の疾病構造において多くの医療費を使用していた傷病名の有無とした2つのモデル（それぞれ，モデル1，モデル2とする。）を比較することにより，どちらの変数を用いることがモデルの予測精度に寄与するかを探索した。その結果，モデル1では調整済 $R^2=0.409$（国保），0.307（後期），モデル2では調整済 $R^2=0.491$（国保），0.374（後期）であり，モデル2</p>			

の説明率が高かった。モデル 2 における独立変数の標準化偏回帰係数（以下、 β ）では、医療サービス利用状況と要介護度に有意な中等度～弱い関連（ $\beta = -0.067 \sim 0.667$, $p < 0.001$ ）がみられ、傷病名は有意な弱い関連を示した（ $\beta = -0.021 \sim 0.131$, $p < 0.05$ ）。以上より、ケースマネジメント対象者の適格基準を高額医療費使用者や多くの医療サービスを利用する者、高度救命救急医療利用者とする、除外基準を事故受傷や長期療養を要さない急性疾患とすることが妥当との示唆を得た。

研究 2 では、慢性疾患患者を対象とした看護師によるケースマネジメントに関する文献を用いて概念分析を行い、高度ケースマネジメントモデルを構築、試行し、その効果を検討した。研究 1 の結果に基づき設定した抽出基準を用い、29 人の対象者を抽出した。うち 26 人が研究参加に同意し、登録直後に辞退した 2 人を除く 24 人に対し介入を行った。研究デザインは、混合研究法を用いた。

介入（高度ケースマネジメント）群と傾向スコアマッチングで抽出した対照群の 2 群を比較した結果、登録前 12 ヶ月間から登録後 12 ヶ月間における医療・介護費の変化量は、介入群が減少傾向、対照群は増加傾向を示したものの群間に有意差はみられなかった（ $p = 0.838$ ）。入院回数、緊急搬送回数の変化量においても群間に有意差はなかったが（それぞれ、 $p = 0.394$, $p = 0.474$ ）、群内の変化では介入群の緊急搬送回数が有意に減少した（ $p = 0.039$ ）。また、介入群の QOL 得点は登録時から登録後 12 ヶ月間まで有意な変化はなかったが（ $p = 0.110$ ）、データを収集した 11 人中 9 人が改善を示した。介入内容の分析結果では、対象者・家族のニーズとサービスの適合がみられ、介入結果からも対象者の心身状態の安定、望む療養や看取りの実現について概ね肯定的な結果を得たことから、本モデルの有用性が示されたと考える。

以上の結果から、本論文は高度ケースマネジメントの対象者の抽出基準を示し、医療依存度の高い者の医療・介護費の低減、緊急搬送回数の減少、QOL の維持・向上への寄与を示唆する高度ケースマネジメントモデルを提案するものであり、地域医療の発展に大きく貢献する研究として高く評価される。

よって審査委員会委員全員は、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。

最終試験の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（看護学）	氏名	加澤 佳奈
学位授与の条件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
医療依存度が高い者の特徴分析と高度ケースマネジメントモデルの試行			
最終試験担当者			
主査	教授	梯 正之	印
審査委員	教授	川崎 裕美	
審査委員	教授	祖父江 育子	
〔最終試験の結果の要旨〕			
判定合格			
上記3名の審査委員会委員全員が出席のうえ、平成30年12月20日の第155回広島大学保健学集談会及び平成30年12月20日日本委員会において最終試験を行い、主として次の試問を行った。			
1 医療依存度が高い者の医療・介護費への影響要因			
2 総合的にみた高度ケースマネジメントモデルの評価			
3 高度ケースマネジメント実践者の能力と教育方法			
4 開発した高度ケースマネジメントモデルの臨床適応			
5 介入の効果を検証するための研究デザイン			
これらに対して極めて適切な解答をなし、本委員会が本人の学位申請論文の内容及び関係事項に関する本人の学識について試験した結果、全員一致していずれも学位を授与するに必要な学識を有するものと認めた。			